

X 学びのコミュニティ研究会

平成 26 年 11 月 1 日 (土)
御荘文化会館 2 階
15:00~

長月「夢の森」見学 14:00~15:00 子どもの遊び場



事例①子どもとともに「長月・夢の森づくり」

「森はともだち」事業で 2 年間、その後吉村さんのご協力で現在まで続いている。事業内容およびご苦労話を伺う。

吉村：最初の 1 年間は、子どもたちと毎日森へ入ってイメージ作りをした。次にどんな森にするのか、絵を描いてもらった。そして、それを実現するために、どれとどれを取り入れるのか、発表会をしてみんなで選んだ。清水先生と森へ入ってイメージ作りもした。

「森がなぜ大切か」ということをテーマに、春先からのホテル観察をして、長月になぜたくさんいるか等、森が持つ意義を子どもたちに伝えている。

最初は大変だと思ったが、子どもが来ると、あまりたいへんだとは思わなくなった。清水：最初は「森はともだち」の推進事業で。子どもはどのくらい森に関わっているのだろう。山に遊びに行くことがあっても、山と関わっていないのではないか。秘密基地など子どもたちと一緒にどんなふうにするのか。

子どもたちに聞いてみた。山が近くにあっても山に入ったことのない子どもや田んぼに入ったことがないという。近くに自然がありながらそういった経験のない子どもが多い。森でどんな活動をしたいか聞いてみた。秘密基地や、木の上に家をつくりたいとか、夢のような話。実現させてやりたいがどのようにしたらいいのかわからない。前 PTA 会長の吉村さんに相談すると、私物の山を貸してあげると言ってくくださった。場が確保

できた。下見、ビデオにとって子どもに見せ、イメージ図を作った。ハンモック、つり橋、梯子を作って登りたいとか、いろいろな意見がでた。授業の時に吉村さんを招いて「できること」の実現に向かった。こんなことをしたいといったら、吉村さんが実現してくれた。絵を描いている時の幸せそうな子ども、大人になったらきっといい思い出として残ると思う。「僕たちの青春の森にしよう」と。スムーズに流れて行った。

Q：枠として、どのくらい、毎週3時間くらいですか。

清水：子どもたちが週末もやりたいということで土日にも森に行っている。

Q：先生もついていくのは大変ではないのですか。

清水：子どもたちの居場所となった山に行くのは、負担でなかった。

吉村：清水先生は女性なので、なかなか要請できなかった。保護者に来てもらうのはどうかと子どもに聞くと、ぜったいだめという。親は「あれがだめ、これがだめ」というからだそう。ペースはとてもスロー、しかし充実していた。

Q：2年間の研究授業からさらにすすめられたのは

校長：私も2年で終わると思っていたが、他の学校の先生に続けてほしいと言われた。また、来年もしないといけないと思ったのは、森への体験に行けるのは5、6年生。3年生や4年生は、「来年は自分たちの番」と楽しみにしていた。Q：いまは、授業としてではなく？

校長：総合的にはやっていると思う。学校の授業だけでは足りない。最初は休みの日はいつも森に行っていた。用事があるときは必ず先生が来ていた。

吉村：毎朝、清水先生からトイレや道具の問題等、相談を受けていた。どこかの森を借りるよりうちの森のほうがやりやすいので、うちの森ですることにした。

清水：5、6年生以下は年間数回しか森に入れない。低学年についてはほんとに夢の森。いっただろなあ、でもいついけるかわからない。でも5年生になったら、自分たちもいけるという仕掛けになっている。補助金は今年度も10万円。林業振興会で。次も続けることが出来るのであれば、もうすこし補助が出る。来年度も実績があるので大丈夫だとおもっている。

讃岐：夢基金があるので、材料費は大丈夫。

Q：保護者の方の理解は。

校長：お礼を言われても、文句を言われたことはない。3月に子どもと保護者を呼んで、1年間このような活動をするので承諾をもらう。子どもが怪我をしても、想定内といわれる。大した怪我もしていない。柄鎌、斧などを持っているので。

Q：横に出ている木など、大人も楽しめる

校長：ひのきなど、一か所に4人程の子どもで番線を作っている。

清水：目的をはっきりさせてからが一番大切だった。子どもの感動の声を聞くと嬉しい。

校長：最初6年生、終わったときに手紙をもらった。「ここを離れるけれど、いつまで

経っても忘れない。ここがふるさとだから」と書いてあった。

清水：遊具をつくるにしても、その木には役割がある。子どもたちはどのような木も大切にできるようになった。植物とか、山に対して特別な思いをもったようだ。

中尾：自然というものが大切ということを教えることで、愛情を知る

Q：参加する子どもに守ってほしいルール

校長：道具を大切に使う。使っていて壊れるのはいいが、違う目的では使わない。あきらめない、がんばる。一緒に来ている友だちを大切に。「ぼくが、わたしが」ではなく、相手を気遣う。森の中なので、なにがあるかわからない。帰る前に注意している。

Q 子どもがけんかすることがあるのでは

校長：女子が強いので、男子の扱いが上手。小学生の時から女性は強い。けんかはほとんどない。作業に没頭している。遊びの順番も、番が来ると声をかけて順番が来たよと教えてくれる。子どもは遊びの達人なので。

福永：一生懸命している姿、こちらが勇気をもらう

いざやらしてみると、感動。子どもたちがつくるという大前提がいい。

清水：子どもたちが自主的に活動していたのが良かった。

吉村：どんなことがあろうと、子どもたちは必ず森へ来る。作業的にはきついので、大人の手を借りている。大人も快く引き受けてくれている。地域にも子どもたちが溶け込んでいる。「子どもの声が聞こえるのいいね」とお年寄りがいってくれる。また、広げていきたい。地域の人や他校の子どもたちも来てくれて、コミュニケーションがとれればいい。

②子どもとつくる「愛南町中高生東北観察研修授業」

南宇和高等学校の映像に興味のある高校生と中学生を連れて、東北へ行った。行くならば、同じ高校生と交流したいということで岩手県宮古市の高校生と交流した。

交通機関と宿だけ大人が決めて、あとの日程は高校生に計画させた。お土産はみかん。東北にはみかんがないので大変喜ばれる。

20時間のインタビューをする。見えてきた思いは、家のある人ない人、家族を亡くした人、仕事をなくした人、仮設住宅・避難所生活、被災した家で頑張る人、市街地と地域など。まるで、そこに自分たちがいたような気持ちになる。慰霊碑は触るためにあるそうだ。

震災の起こった3月11日は、どのような行動をしたのか、全く同じに行動してみる。映画作り。

ニュースの映像、座談会などすべて含め、ドラマ仕立てにした。海を見ながらのラストシーン。裸足になって海に入る、臨場感がないから。先日、クランクアップした。30分強の映画となった。

生徒会長は地域のふれあいが必要なんだなあと。彼は東北の大学へ進学するが、

愛南町に帰るために東北へ行く。

12月に東北の子どもを愛南町を呼ぶことにしている。8名。語り部ガイドをしてる高校生が愛南町のみなさんに聞いてもらおうと楽しみにしている。また、東北の高校生と愛南の高校生とでいかだで釣りをする予定。

災害が起きたとき、中高校生は守られる側ではなく、守る側であると意識してほしい。様々な形で学び続けることにしている。

山下：震災から2年後に行った。ずっと、岩手にいたが自分の無力さを感じた。子どもにどのようなことを伝えることが出来るか。いいところだと子どもに伝えて行ってもらうことが必要。経済的復興も大変である。帰って来て、人とのつながりが大切だと思ってくれた。生徒会長は、一体感のあるまちづくりのなかで、自分たちは大切なポジションにいると感じてくれた。

行って帰って来ることがゴールではなく、始まりだと考えてくれる。守られる側ではなく、守る側の子どもたちを育てていきたい。

中尾：向こうの高校生は、新しい町づくりということを考えている。映画で中心になるのは、「県外ナンバーの観光バス、見世物ではない。大嫌い。」といわれた。子どもたちは、「どうして」とずっと引っかかっていたようだ。4日間くらい東北にいて何がわかるのか、その高校生は、分かってほしいと思っていたに違いない。それが結論。

仙波：先日、松山市の久米で気仙沼の木材の町住田町の町長を呼んでシンポジウムをした。日本では初めて木材の仮設小屋を建てた人。防災教育をしたが、久米は防災意識は高まらない。災害の来ない町だと思っているからだと思う。ただ、子どもたちが今後、どこへ行くかわからないので、その時のためにもと思い、防災教育をした。

山下：木材の仮設住宅は仮設ではなく、一軒家みたいに見える。

中尾：仮設住宅は結露で大変。仮設ではなかなか住めない。その点、木材だと違うと思う。12月7日にこのホールで東北の子どもがくる。東北で写真展をしている子どもも参加する。よければ来てほしい。

総評 讃岐 幸治

童話の世界でも、白雪姫の話にみるように、森は夢をイメージしやすい。「夢の森づくり」、いい名称だ。「1人で見る夢はただの夢、みんなで見る夢は現実になる。」そんな話だ。ドリーム、ドラマがダイナミックに展開している。

遊び場といえば、ブランコ、滑り台、シーソーと、固定遊具ばかりで、子どもはそれらに合わせて遊ぶことになり、いつも同じように遊びしかできなかった。年齢に応じて遊びを発展させていくこともできない。創意工夫することもない。遊びは広がらないし、深まらないし、まったく面白くなかった。これではいけない。

遊び場というのは、子どもと大人、大人と大人、子どもと子どもが会える場でなけれ

ばならない。いろいろな人がかかわりあって、いろいろな活動を作り出していく。個々人の能力を伸ばし、人と人との交流や協働をうながしていくところでなければならない。「夢の森づもり」はそんな遊び場になっている。

もう一つ、子どもが受動的、画一的で、孤立化している。あれこれ言われないと動かない。同じようなことしかしない。みんながばらばらで、孤立化している。この状況を克服する必要がある。困難や危機にひるむことなく、チャレンジしていく、そんな子どもになってほしい。与えられたことしかしないこどもでなく、自ら創っていきクリエイティブな子ども、社会の担い手になる、そんな子どもになってほしい。また、孤立し、引きこもるのではなく、いろいろな人とかかわって協働していくコーポレートな子どもになってほしい。「夢の森づくり」は、子ども達が挑戦し、創造し、共同しなければならない活動の場となっている。

もう一つ注目したのは、夢の森づくりは大人が遊ぶ場になっている。大人が面白く、遊んでいる。高学年の子どもがそれに加わる。低学年の子どもがそれに憧れ、森に入れる年齢になったら、いそしんで加わる。そんな流れになっている。「憧れに憧れ」というやり方で、活動の引き継ぎ、リレーが行われている。地域における活動の進め方として注目される。

また、活動がどんどん広く、深くなっている。遊び場が山全体に広がっていている。また、森づくりにかかわる人も増え、いろいろな絡んでつくりあげる。こうした「夢の森づくり」が各地に点火し、広がっていけばと思う。すごい実践だ。

被災地東北に行った体験をもとに、中高生が映画づくりに取り組んでいる実践、全国的にユニークな実践だ。この報告を聞いて思うのは、高校生は、機会が与えられたら伸びるのもだ、ということだ。これまで、子どもを大事にするということで、家庭の手伝いをさせるでもなし、地域の活動を担わせるでもなく、なにもさせないことをよしとしてきた。負担になることはさせないことが、いいことだという風潮が強く、子どもから役割を奪ってきた。なにもさせなくなっている。それはおかしいのではないか。

「子どもは必要とされて大人になる。」だれでも必要とされると人は頑張るものである。小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに。「潜在的能力が爆発的に開花するのは、自分のためというよりむしろ自分に向かって『この仕事をしてもらいたい』と懇請してくる他者の切迫だ」。頼む、お前しかいない、と期待され、任されたとき、その潜在能力を開花させるものだ。

社会が子どもを育てるという視点だけでなく、子どもが社会を支える、創るという視点も大事にしたい。この実践は、愛南町がそのようなことをやろうとしている。子どもを「つくられる存在」から「つくる存在」へと転換させていく事例だともいえる。

行動は「見る」、「行く」、「する」、「役に立つ」の四つの段階に分けられる。たとえば野球でいえば、家でテレビでプロ野球を寝ころんででも「見る」ことができる。なのに、

球場に何万人も「行く」のはなぜか。感動を一緒にすることができるだ。それよりも、へたくそでも自ら汗を流して草野球を「する」方がより感動する。さらに、その活動がチームや地域のために「役に立った」と感じられたとき、より気持ちいいものだ。主体的になるほど、「つくる存在」へすすむほど、やりがいを感じるし、能力を開花させていくものである。

感動がすくなくなった。元に戻さなくてはいけない。その方が現実的。

今回の話はとてもよかった。ガウディではないが、少しずつ、いろんな人の手で、進めていって欲しい。この運動を続けていって欲しいと願う。

